

# 親からの期待認知と大学生のキャリア成熟との関連 —大学生の現在の居住形態に着目して—

内田 利広・藤崎 このみ\*

Relationship between Perceptions of Parental Expectations and University Students' Career Maturity:  
A Focus on University Students' Current Residential Status

Toshihiro UCHIDA, Konomi FUJISAKI

*Accepted June 19, 2018*

**抄録：**本研究は、親の期待認知を大学生がどのように受け止め、そのことが大学生のキャリア成熟とどのように関連しているのかを大学生の住居形態も含めて明らかにしようとしたものである。大学4年生167名に質問紙調査を行い、5つの仮説をたてて、検証した。その結果、期待認知の高さと自律ある行動及び計画性のある行動との関連が示された。また、期待に対する重荷の認知は、自律的な行動と負の関係にある傾向が示された。大学生の現在の居住形態による期待認知の差が見られなかったことより、期待認知が一朝一夕に変化するものではなく、幼いころからの親からの期待の体験により形成された強固な認知的枠組みであった。また先行研究では重荷は消極的な行動につながるネガティブなものとして捉えられてきたが、本研究では重荷にも積極的な行動につながるポジティブな側面を持っている、ということが明らかになった。

**索引語：**期待認知, キャリア成熟, 重荷, 居住形態

**Abstract:** This study sought to analyze the relation between university students' perceptions of parental expectations and career maturity among those students. In addition, this relationship was also analyzed with regard to the students' residential status. Based on the responses to a questionnaire survey administered to 167 fourth-year students, five hypotheses were posited and subjected to verification. The results indicated the relation between the perceptions of expectations and autonomous behavior among students. In addition, the perceptions of such expectations as a burden was shown to be inversely related with autonomous behavior. Since no differences were observed in terms of perceptions of expectations with regard to students' current residential status, the perception of expectations was regarded as a rigorous cognitive framework formed by the personal experience of parental expectations from a young age rather than something that might change overnight. In addition, while the notion of burden has been conceptualized in previous studies as something negative leading to passive behavior, in this study it became clear that burden also possessed a positive aspect leading to proactive behavior.

**Key Words:** perception of expectations, career maturity, burden, residential status

---

\* 舞鶴市立明倫小学校

## 1. 問題と目的

### (1) 親の期待認知

親は様々な願望を、期待という形で子どもに抱く。たとえば「健やかに育ってほしい」「優しい人に育ってほしい」というものや、「優秀な成績であってほしい」「将来こんな仕事についてほしい」「言うことを聞くよい子であってほしい」などである。このように様々な期待を受ける子どもはときに期待を励みに捉え期待に応えようと努力し、ときに期待に応えなければならないことを重荷に感じてプレッシャーに押しつぶされそうになったり、やる気を失ったりする。

親からの期待に関する研究は様々なかたちで行われている。内田（2014）は、不登校支援における親の期待とあきらめについて、考察を行っている。春日・宇都宮（2011）は、親からの期待と子どもの自尊感情についての研究を行い、親からの期待に対する質問項目を抽出し、第一因子は「人に優しくしてほしい」などからなる18項目で、子どもの性格や人格に対する期待であると考え、「人間性期待」と命名した。第2因子は「良い成績を取ってほしい」、「いい企業に就職してほしい」などからなる11項目で「教育・就職期待」と命名した。次に、親からの期待に対して子どもがどのように感じているのかという評価に関する質問項目を抽出し第1因子は、「期待されてつらかった」など、期待を重荷、負担としている12項目で「重荷因子」と命名した。第2因子は「期待されて励みに感じた」などからなる6項目で、期待されることを嬉しく思い、また励みにしていた「励み」因子と命名した。そして、親から「思いやりを持ってほしい」や「ひとに優しくしてほしい」などの人間性に対する期待（人間性期待）を受けていたと認知し、その期待を励みに捉えていた大学生は自尊感情が高いことを明らかにした。また、男女ともに父よりも母からの期待を強く認知しており、特に女性は男性に比べて母親からの期待を励みになると感じているとともに、重荷に感じる傾向にあることも明らかにした。これは女性の方が母親との情緒的つながりが強く、養育態度の影響を受けやすい事が要因として考えられる。さらに、「人間性期待」が「励み」、「教育・就職期待」が「重荷」に正の影響を与えていた。「人間性期待」は一般的な社会的規範に則ったもので、子どもにとって受容しやすく、望ましいと考えられる。反対に「教育・就職期待」はよい成績を残す、よい会社に入るなど、実現することが困難であり、またそのための努力が必要であるために「重荷」と感じると考えられる。期待に対してとった行動には、「励み」が「受容・積極型行動」及び「回避・葛藤型行動」に正の影響を与えており、「重荷」が「回避・葛藤型行動」に正の影響を与えていた。「励み」と感じることで期待に応えようとし、「重荷」と感じることで期待に反する、もしくは関係がない行動をとることは自然なことであると考えられる。春日ら（2014）は、親からの期待と子どもの生活満足感と自己抑制型行動特性との関連についても検討している。この結果親から進路に対する期待を認知し、重荷に感じながらも期待に応えようとする大学生は自己抑制的な性格を高め、その性格が高まることによって無理をして期待に応えるというサイクルの存在を示した。また、親から人間性に対する期待を強く感じたと認知している大学生は親の期待に対して励みに感じているとともに、父母との関係に対する満足感（家庭関係満足感）も高いことを明らかにした。その中で受験や進学といったライフイベントを迎えた際、親の期待に過度に応えようとすることでそれまでの肯定感の喪失や変質によって、自己を肯定的にとらえられなくなるということが明らかにされてきた。親の期待認知に関する研究では、ライフイベントを縦断的に調査し親の期待認知を見ていくことが今後の課題とされている。

## (2) 大学生のキャリア成熟

キャリア成熟とは、「キャリアの選択・決定やその後の適応への個人のレディネス」(坂柳, 1991)と定義される。坂柳(1996)は大学生の職業選択や就職について、就職という一時点だけにとらわれるのではなく、自己のキャリア(生涯進路)という長い線で見据え進んでいく姿勢が大切になると述べ、大学生のキャリアに関する考えの成熟度をみるキャリアレディネス尺度(以下 CRS)を作成した。「レディネス」とは準備が整っている状態を指す言葉である。職業選択と職業生活への取り組みの姿勢をみる「職業キャリアレディネス尺度(以下 OCRS)」, 人生や生き方への取り組みの姿勢をみる「人生キャリアレディネス尺度(以下 LCRS)」の二尺度を作成し、それぞれの尺度に、自己のキャリアに対して積極的な関心を持っているか(関心性)、自己のキャリアへの取り組み姿勢が自律的であるか(自律性)、将来展望を持ち自己のキャリアに対して計画的であるか(計画性)という構成要素を設定し、信頼性と妥当性を確認している。

また、文部科学省が行っている学校基本調査によると、平成 29 年 3 月に大学の学部を卒業した学生のうち、安定的な雇用に就いていない者が大学卒業者の 4.8%, 進学も就職もしていない者が 7.8% いることが示されている(文部科学省, 2017)。大学卒業後の就職状況については社会の現状も要因の一つではあるが、学生自身のキャリア成熟も要因として挙げられるのではないかと考える。

## (3) 大学生の居住形態

大学生になると他府県への進学などをきっかけに今まで共に過ごしてきた家族と別れ、大学の学生寮や一人暮らしなどを始める学生も多い。ベネッセ教育総合研究所が 2008 年に行った大学生の居住形態に関する調査によると、大学生のうち実家暮らしが 58.1%, 一人暮らし 37.1%, 大学の寮が 2.3%, その他が 2.5%となっており、実家で親と同居している学生が自宅外の学生よりもやや多いということがわかる。

吉田ら(2014)は、大学生の居住形態が心理的負債感(援助を受けた相手に対する返報する義務を感じる状態)に及ぼす影響について研究している。家族と別居している大学生の方が同居している大学生よりも心理的負債感が高い傾向にあるということが明らかになった。このような結果が出た要因として家族と離れて初めて家族のありがたみを感じて相手に返報意識を感じるなどが挙げられていた。ただ、大学生の居住形態と親からの期待認知との関連を研究した先行研究はみられなかった。

前述したように親の期待認知に関する研究では、ライフイベントを縦断的に調査し親の期待認知を見ていくことが今後の課題とされている。

大学 4 回生にとって最も身近で差し迫ったライフイベントは大学卒業と就職の二つである。大半の学生が就職活動を終え、残り数カ月の大学生活を終えると社会人となる大学 4 回生は親からどのような期待を受けているのか。その期待を励みに感じている学生と、重荷に感じている学生とでは自身の今後の人生に対するキャリア成熟にも違いが見られるのではないだろうかと考えた。

そこで本研究では、就職活動を終え卒業が迫っている大学 4 回生の卒業・就職というライフイベントに着目して調査・研究を行った。大学 4 回生が親からどのような期待を感じ、どう受け止めているのか、大学生のキャリア成熟との関連について検討する。

さらに、さまざまな環境で育ってきた子どもが、青年期を迎え心理的離乳を果たすとともに、大学進学をきっかけに親元を離れている学生と、現在も同居している学生とでは親と接する機会のちがいなどから、期待認知に差が生じるのではないかと考えたため、居住形態によるちがいについても検討していきたい。

そこで、本研究の仮説は以下のように設定した。

- 1) 人間性に関する期待に対する期待認知の高さと、キャリアレディネスにおける自律ある行動は正の相関がある。
- 2) 教育や就職に関する期待認知の高さと職業キャリアレディネスにおける計画性のある行動、職業に関する関心の強さは正の相関がある。
- 3) 親からの期待に対する重荷の認知とキャリアレディネスにおける自律的な行動は負の相関がある。
- 4) 親と別居している学生は、家族と同居している学生より期待認知が低い。
- 5) 親と別居している学生は、家族と同居している学生よりも期待に対して励みに感じている。

## 2. 方法

調査対象者は大学4年生 167名で、調査時期は2017年10月～11月である。

調査方法は質問紙調査をおこなった。フェイスシートに回生を回答してもらい、性別と現在の居住形態について回答してもらった。

次に大学生が親からどのような期待をされていると認知しているのかを調査するために春日・宇都宮が作成した「親からの期待尺度」を使用した。先行研究で示された29項目から、「いい高校・大学に行って欲しい」という項目は今回大学4年生が対象であることを考えると不適切な項目であると判断したため削除した28項目について「あなたが現在親から感じている期待について、当てはまると思う数字に○をつけてください。」という指示のもと5件法で回答を求めた。

次に大学生が親からの期待に対してどのように感じていたのかを調べるために春日・宇都宮が作成した「期待に対する評価尺度」を使用した。この尺度は抽出された19項目について「あなたが親からの期待を感じた時の気持ちについて、当てはまる番号に○をしてください。」という指示のもと、5件法で回答を求めた。

次に大学生が職業選択や今後の仕事に対する考え方、今後の人生についてどのような意識を持ち、どのようなことに取り組んでいるのかについて調査するために、坂柳が作成した「職業キャリアレディネス尺度 (O CRS)」と「人生キャリアレディネス尺度 (L CRS)」を使用した。それぞれ27項目からなるこの二尺度について「あなた自身について当てはまる数字に○をつけてください」とし5件法で回答を求めた。ただし就職活動に関する質問項目がある O CRS については就職活動が既に終了している学生も多くいることが予想されたため、「就職活動が終了している方については、就職活動や職業選択に関する質問はご自身の就職活動中などを振り返って回答して下さい」という但し書きを付けることとした。

## 3. 結果

### (1) 対象者の属性

調査協力者は167名で男性68名、女性99名であった。現在の居住形態については、「親と同居」が80名、「一人暮らし」が69名、「大学の寮」が17名、「その他」は1名という回答であった。

## (2) 各尺度の因子分析

### 1) 親からの期待尺度

親からの期待尺度について因子分析（主因子法，promax 回転）を行い，因子負荷量が .40 以上を基準として各因子に十分な負荷量を示さなかった「4. 倫理観を持ってほしい」，「13. 何事にも積極的になってほしい」，「20. 自分のことは自分で責任を持ってほしい」の3項目を削除したところ，第一因子は「人にやさしくしてほしい」や「くじけず，負けない人間になってほしい」といった項目が含まれており，「人間性期待」（ $\alpha = .89$ ），第二因子は「良い成績をとってほしい」や「良い企業に就職してほしい」といった項目が含まれており，「教育・就職期待」（ $\alpha = .89$ ）と命名した。（Table.1）。先行研究と同様の因子分析の結果となった。

### 2) 期待に対する評価尺度

期待に対する評価尺度について因子分析（主因子法，promax 回転）を行い，因子負荷量がどちらの因子でも上回ったため「4. 期待を裏切ってはいけないと思った」の1項目を削除した。第一因子は「期待を重荷に感じた」や「期待されることにつかれた」といった項目が含まれており，「重荷」（ $\alpha = .91$ ）と命名した。第二因子は「期待されてうれしいと感じた」や「期待に応えられるよう頑張ろうと思った」といった項目が含まれており，「励み」（ $\alpha = .90$ ）と命名した（Table.2）。この尺度も先行研究と同様の因子分析の結果となった。

### 3) OCRS 尺度

OCRS については因子分析を行ったが十分な信頼性を得ることが出来なかったため，先行研究の下位尺度で信頼性分析を行った。先行研究の第一因子である「将来の職業や就職についてとても関心を持っている」などの項目からなる「関心性」が  $\alpha = .72$ ，「就職の準備は他の人に言われなくても自主的に進めることができた」などの項目からなる第二因子の「自律性」が  $\alpha = .67$ ，「すでに計画に従って就職活動のための勉強をしている」などの項目からなる第三因子の「計画性」が  $\alpha = .62$  という結果となった。そのため妥当性も認められると判断し，本研究では先行研究の因子構造を用いることとした（Table.3）。

### 4) LCRS 尺度

LCRS について因子分析（主因子法，promax 回転）を行い，因子負荷量が .40 以上を基準として各因子に十分な負荷量を示さなかった「9. これからの人生設計は自分の個性と社会状況の両面から十分に考えている」，「11. どんな生き方をしていけばよいかは最終的には自分で決める」の2項目を削除したところ，先行研究とは異なる因子構造が確認された。そこで「これからの人生は自分で責任を自覚して送ろうと思う」や「人生を充実させるためには面倒なことでも積極的にチャレンジする」といった項目が含まれている第一因子を「積極的将来展望」（ $\alpha = .89$ ），「人生設計や生き方についての記事にはよく目を通すようにしている」や「希望する生き方を送るための具体的な計画をたてている」といった項目が含まれている第二因子を「将来への関心・計画性」（ $\alpha = .77$ ），「人生をどう過ごすかは他の人が考え始める頃に自分も考えればよい」や「どのような生き方をしたいかまだわからない」といった項目が含まれている第三因子を「消極的将来展望」（ $\alpha = .72$ ）と命名した（Table.4）。

Table. 1 親からの期待尺度の因子分析結果

|                                                  | F1    | F2    |
|--------------------------------------------------|-------|-------|
| <b>第一因子: 人間性期待 (<math>\alpha = .89</math>)</b>   |       |       |
| 22. 人にやさしくしてほしい                                  | .789  | -.129 |
| 16. 思いやりを持ってほしい                                  | .727  | -.001 |
| 18. 正直でいてほしい                                     | .713  | .029  |
| 9. 自分の満足のいく生き方をしてほしい                             | .680  | -.225 |
| 21. 健康に育ってほしい                                    | .631  | -.225 |
| 23. 自分のやりたい仕事を見つけてほしい                            | .631  | -.213 |
| 8. 挨拶ができる人間になってほしい                               | .623  | .074  |
| 11. よい人間関係を持ってほしい                                | .620  | .220  |
| 17. 自分の意見を言える人間になってほしい                           | .606  | .136  |
| 26. 人を外見で判断しない人間になってほしい                          | .574  | .123  |
| 5. 多くの友人関係を築いてほしい                                | .573  | .085  |
| 6. 夢を追いつけてほしい                                    | .464  | -.083 |
| 15. くじけず、負けない人間になってほしい                           | .462  | .291  |
| <b>第二因子: 教育・就職期待 (<math>\alpha = .89</math>)</b> |       |       |
| 28. 良い成績を取ってほしい                                  | -.175 | .853  |
| 19. 賢くあってほしい                                     | -.141 | .790  |
| 27. 勉強ができる子であってほしい                               | -.051 | .767  |
| 24. 業績の良いところに就職してほしい                             | .000  | .674  |
| 10. 良い企業に就職してほしい                                 | .047  | .647  |
| 14. 安定した職業に就いてほしい                                | .013  | .641  |
| 1. 親の言うことを聞いてほしい                                 | -.166 | .626  |
| 3. 将来のためにしっかり勉強してほしい                             | .081  | .603  |
| 12. 何に関しても一番になってほしい                              | -.111 | .565  |
| 25. 立派な社会人になってほしい                                | .219  | .552  |
| 2. 良いパートナーを見つけてほしい                               | .044  | .461  |
| 因子間相関                                            |       | .409  |

Table. 2 期待に対する評価尺度の因子分析結果

|                                             | F1    | F2    |
|---------------------------------------------|-------|-------|
| <b>第一因子: 重荷 (<math>\alpha = .91</math>)</b> |       |       |
| 11. 期待されることを嫌だと感じた                          | .823  | -.110 |
| 9. 期待されてつらいと思った                             | .810  | .049  |
| 10. 放っておいてほしいと思った                           | .788  | -.009 |
| 16. そんなこと言われなくても分かっていると思った                  | .744  | .071  |
| 6. 親に自分の何が分かるのかと思った                         | .743  | .002  |
| 12. 期待を重荷に感じた                               | .738  | .012  |
| 8. 自分に口出ししないでほしいと思った                        | .711  | .015  |
| 15. 期待されることでやる気を失った                         | .705  | -.192 |
| 3. 期待されることに疲れた                              | .703  | .020  |
| 18. 期待する親に対して悪い印象を持った                       | .687  | -.106 |
| 19. 結果を出せなかったらどうしようと不安になった                  | .483  | .145  |
| 17. 親を見返してやろうと思った                           | .466  | .088  |
| <b>第二因子: 励み (<math>\alpha = .90</math>)</b> |       |       |
| 14. 期待されて嬉しいと感じた                            | -.081 | .810  |
| 7. 期待に応えられるよう頑張ろうと思った                       | .205  | .789  |
| 5. 期待されることでやる気が出た                           | -.046 | .784  |
| 2. 期待する親に対して感謝する                            | -.035 | .784  |
| 13. 期待されることで背中を押されるように思った                   | .072  | .777  |
| 1. 期待されて励みに思った                              | -.159 | .658  |
| 因子間相関                                       |       | -.295 |

Table. 3 OCRS の因子構造

**第一因子：関心性 ( $\alpha = .72$ )**

- 26. 将来の職業や就職についてとても関心を持っている
- 13. 職業や就職に関する記事にはよく目を通すようにしている
- R12. 将来の職業生活をどう過ごすかはあまり関心がない
- 24. 希望する職業に就くためにはどうすればよいか調べたことがある
- 4. 将来の職業や就職先についていろいろ比較し検討している
- 15. 将来充実した職業生活を送るために参考になる話は注意して聞いている
- 7. どのような職業が自分に向いているのか真剣に考えたことがある
- R14. 自分は何のために働くのか真剣に考えたことがない
- 25. 職業選択や就職は自分にとって重大な問題なので真剣に考えている

**第二因子：自律性 ( $\alpha = .67$ )**

- 20. 職業人になったら自ら進んで積極的に仕事を行おうと思う
- 27. 就職の準備は他の人に言われなくても自主的に進めることができた
- 23. 職業の選択・決定では周囲の雰囲気流されることはない
- 21. 充実した職業生活が送れないのは自分自身の責任が大きいと思う
- 22. 職業人になってからは責任を自覚して仕事に取り組もうと思う
- R6. 職業人になってからも責任の重い仕事はやりたくない
- 2. 職場で難しい問題にぶつかっても自分なりに克服していこうと思う
- 10. 職業生活を充実させるためには面倒なことでも積極的にチャレンジする
- 1. 職業生活を通して自分自身を向上させたい

**第三因子：計画性 ( $\alpha = .62$ )**

- R16. 自分は将来どんな職業に就いているか分からない
- 18. 自分の将来の職業生活の様子は大体想像できる
- 19. 希望する職業に就くための具体的な計画をたてている
- 3. どのような職業人になりたいのか自分なりの目標を持っている
- R5. どのような職業に就きたいのかまだ分からない
- R17. 今希望している職業はまたすぐ変わるかもしれない
- R8. 就きたい職業は決めたがそれに向けて積極的な努力はしていない
- 9. すでに計画に従って就職活動のための勉強をしている
- 11. 職業選択や就職は自分の個性と就職機会の両面から十分考えている

Table. 4 LCRS 因子分析結果

|                                                    | F1    | F2    | F3    |
|----------------------------------------------------|-------|-------|-------|
| <b>第一因子：積極的将来展望 (<math>\alpha = .89</math>)</b>    |       |       |       |
| 4. 今後の人生で困難なことに突き当たっても自分なりに克服していこうと思う              | .858  | -.234 | .126  |
| 27. これからの人生は自分で責任を自覚して送ろうと思う                       | .820  | -.231 | .094  |
| 19. 人生を充実させるためには面倒なことでも積極的にチャレンジする                 | .693  | .066  | -.020 |
| 18. これからの人生や生き方についてとても関心を持っている                     | .690  | .043  | -.105 |
| 26. これからの人生は自分の力で切り開いていくことができる                     | .606  | .063  | .033  |
| 20. 希望する人生が送れるように日頃から自分を向上させるよう心がけている              | .600  | .187  | -.178 |
| 21. これから先どのような人間になりたいのか自分なりの目標を持っている               | .595  | .114  | -.044 |
| 5. 将来の生き方は自分にとって重要な問題なので真剣に考えている                   | .583  | .173  | -.125 |
| 23. 今後の人生を充実させるために参考になる話に耳を傾けるようにしている              | .549  | .108  | .069  |
| 6. 今希望している人生や生き方は自分なりに実現できそうだと思う                   | .440  | .149  | .039  |
| <b>第二因子：将来への関心・計画性 (<math>\alpha = .77</math>)</b> |       |       |       |
| 25. 人生設計や生き方についての記事には良く目を通すようにしている                 | -.085 | .768  | .179  |
| 3. 希望する人生を送るにはどうしたらよいか調べたことがある                     | .033  | .668  | .173  |
| 10. どのような人生・生き方があるか本や新聞などで読んだことがある                 | -.063 | .628  | .206  |
| 17. 希望する生き方を送るための具体的な計画をたてている                      | .079  | .560  | -.335 |
| 15. どのような生き方が自分に向いているのか真剣に考えたことがある                 | .173  | .466  | .251  |
| 16. 自分の今後の人生は大体想像できる                               | -.031 | .403  | -.186 |
| 1. 充実した人生を送るための計画に沿って既に取り組んでいることがある                | .204  | .400  | -.278 |
| <b>第三因子：消極的将来展望 (<math>\alpha = .72</math>)</b>    |       |       |       |
| R13. 人生をどう過ごすかは他の人が考え始めるころに自分も考えればよい               | -.101 | .275  | .550  |
| R14. これからの人生をどう過ごすかは周囲の雰囲気に合わせて決めようと思う             | .221  | -.103 | .518  |
| R12. 自分は将来どのような人生を送っているかわからない                      | -.065 | -.268 | .512  |
| R22. 人生設計や生き方にはあまり興味がない                            | .033  | .224  | .476  |
| R7. 今希望している生き方はまたすぐに変わるかもしれない                      | -.030 | .087  | .475  |
| R2. どのような生き方をしたいかわからない                             | -.068 | .040  | .433  |
| R8. まだしばらくの間は責任のある生活はしたくない                         | .002  | -.024 | .428  |
| R24. 自分は何のために生きていくのか真剣に考えたことがない                    | .158  | .106  | .427  |
| 因子間相関                                              |       |       | .578  |
|                                                    |       |       | -.156 |

### (3) 仮説の検証

まず、仮説1を検証するために各下位尺度で相関分析を行った (Table.5)。「人間性期待」とキャリア・アレディネスの「自律性」の相関係数を見てみると、OCRSの「自律性」、LCRSの「積極的将来展望」、将来への関心・計画性と弱い正の相関がみられた ( $r = .25, p < .001, r = .32, p < .001, r = .20, p < .01$ )。

Table. 5 相関分析の結果

|              | 親からの期待尺度 |         | 期待に対する評価尺度 |          | OCRS    |         |         | LCRS    |         |         |
|--------------|----------|---------|------------|----------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
|              | 1        | 2       | 3          | 4        | 5       | 6       | 7       | 8       | 9       | 10      |
| 1.人間性期待      | —        | .35 *** | -.16       | .37 ***  | .24 *** | .25 *** | .25 *** | .32 *** | .20 **  | -.05    |
| 2.教育・就職期待    |          | —       | .44 ***    | -.01     | .21 **  | .12     | .24 **  | .24 **  | .12     | .13 **  |
| 3.重荷         |          |         | —          | -.28 *** | -.01    | .03     | .04     | -.18 *  | .07     | .04     |
| 4.励み         |          |         |            | —        | .33 *** | .29 *** | .15 *   | .34 *** | .23 *** | -.09    |
| 5.関心性        |          |         |            |          | —       | .63 *** | .54 *** | .64 *** | .48 *** | .13     |
| 6.自律性        |          |         |            |          |         | —       | 0.6 *** | .62 *** | .35 *** | .26 *** |
| 7.計画性        |          |         |            |          |         |         | —       | 0.5 *** | .42 *** | .11     |
| 8.積極的将来展望    |          |         |            |          |         |         |         | —       | .58 *** | .10     |
| 9.将来への関心・計画性 |          |         |            |          |         |         |         |         | —       | -.01    |
| 10.消極的将来展望   |          |         |            |          |         |         |         |         |         | —       |

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$ 

次に仮説2を検証するためにTable.5の相関分析の表を見ると、「教育・就職期待」とOCRSの「関心性」、「計画性」ともに弱い正の相関がみられた ( $r=.21$ ,  $p<.01$ ,  $r=.24$ ,  $p<.01$ )。

次に仮説3を検証するためにTable.5を見ると、「重荷」とOCRSの「自律性」の間に相関は見られなかった。またLCRSについても「積極的将来展望」と非常に弱い負の相関がみられるが ( $r=-.18$ ,  $p<.05$ )、「将来への関心・計画性」とは有意な相関がみられなかった。

次に仮説4を検証するために親と同居と一人暮らしの二群で期待の認知得点のt検定を行った(Table.6)。しかし、どの二群の間にも有意差はみられなかった。

Table. 6 現在の居住形態別の平均値およびt検定の結果

|          | 親と同居<br>(N=80) |       | 一人暮らし<br>(N=69) |       | 全体<br>(N=149) |       | t値   |
|----------|----------------|-------|-----------------|-------|---------------|-------|------|
|          | M              | (SD)  | M               | (SD)  | M             | (SD)  |      |
| 親からの期待認知 | 3.62           | (.55) | 3.63            | (.60) | 3.64          | (.57) | -.09 |
| 人間性期待    | 3.84           | (.64) | 3.92            | (.69) | 3.89          | (.65) | -.80 |
| 教育就職期待   | 3.35           | (.79) | 3.28            | (.79) | 3.34          | (.78) | .50  |

次に仮説5を検証するために、親と同居と一人暮らしの二群で期待の評価得点のt検定を行った(Table.7)。その結果「励み」について有意傾向がみられた ( $t(147) = -1.85$ ,  $p<.10$ )。また「重荷」についても、5%水準で有意に親と同居群の得点が高いことが示された ( $t(147) = 2.44$ ,  $p<.05$ )。

Table. 7 現在の居住形態別の平均値およびt検定の結果

|    | 親と同居<br>(N=80) |       | 一人暮らし<br>(N=69) |       | 全体<br>(N=149) |       | t値      |
|----|----------------|-------|-----------------|-------|---------------|-------|---------|
|    | M              | (SD)  | M               | (SD)  | M             | (SD)  |         |
| 重荷 | 2.88           | (.81) | 2.55            | (.82) | 2.75          | (.86) | 2.44 *  |
| 励み | 3.08           | (.81) | 3.34            | (.87) | 3.19          | (.85) | -1.85 † |

†  $p < .10$ , \*  $p < .05$

このことから、一人暮らしをしている大学生のほうが親と同居している大学生よりも親からの期待に対して励みに思っている傾向にあり、親と同居している大学生のほうが親からの期待を有意に重荷に感じているということがいえる。

#### (4) 重荷（高・低）×期待認知（高・低）の二要因分散分析

次に、「重荷」と「期待認知」を平均値で高群と低群にそれぞれ群分けし、キャリアレディネスの下位尺度を従属変数とした二要因分散分析を行った（Table.8）。その結果、期待認知において「OCRS」（ $F = 5.88$   $r < .05$ ）「関心性」（ $F=7.05$   $r < .01$ ）「計画性」（ $F=5.31$   $r < .05$ ）「LCRS」（ $F=5.05$   $r < .05$ ）「積極的将来展望」（ $F=6.60$   $r < .05$ ）「将来への関心・計画性」（ $F=5.80$   $r < .05$ ）の6項目で有意な主効果がみられた。このことから期待認知高群の得点が有意に高いといえる。

また計画性において有意傾向ではあるが、交互作用が示されており「重荷」低群×「期待認知」高群、「重荷」高群×「期待認知」高群、「重荷」高群×「期待認知」低群、「重荷」低群×「期待認知」低群の順に「計画性」が高い傾向にあるということがわかった（Figure.1）。

Table. 8 重荷×期待認知の二要因分散分析の結果

| 重荷<br>期待認知     | 高(N=80)     |             | 低(N=87)     |             | F値   |        | 交互作用            |
|----------------|-------------|-------------|-------------|-------------|------|--------|-----------------|
|                | 高<br>(N=45) | 低<br>(N=35) | 高<br>(N=43) | 低<br>(N=44) | 重荷   | 期待認知   |                 |
| OCRS           | 3.67        | 3.55        | 3.71        | 3.42        | .25  | 5.88*  | .97 <i>n.s.</i> |
| (SD)           | (.51)       | (.40)       | (.45)       | (.36)       |      |        |                 |
| 関心性            | 3.73        | 3.48        | 3.69        | 3.46        | .10  | 7.05** | .00 <i>n.s.</i> |
| (SD)           | (.57)       | (.59)       | (.60)       | (.56)       |      |        |                 |
| 自律性            | 3.75        | 3.68        | 3.80        | 3.59        | .05  | 3.15   | .75 <i>n.s.</i> |
| (SD)           | (.52)       | (.47)       | (.48)       | (.54)       |      |        |                 |
| 計画性            | 3.53        | 3.49        | 3.65        | 3.29        | .27  | 5.31*  | 3.33 †          |
| (SD)           | (.61)       | (.45)       | (.56)       | (.56)       |      |        |                 |
| LCRS           | 3.53        | 3.40        | 3.54        | 3.35        | .17  | 5.05*  | .26 <i>n.s.</i> |
| (SD)           | (.46)       | (.39)       | (.50)       | (.48)       |      |        |                 |
| 積極的将来展望        | 3.77        | 3.56        | 3.96        | 3.65        | 1.91 | 6.60*  | .26 <i>n.s.</i> |
| (SD)           | (.65)       | (.61)       | (.67)       | (.64)       |      |        |                 |
| 将来への関心・<br>計画性 | 3.33        | 3.02        | 3.14        | 2.91        | 1.72 | 5.80*  | .12 <i>n.s.</i> |
| (SD)           | (.68)       | (.61)       | (.79)       | (.76)       |      |        |                 |
| 消極的将来展望        | 3.30        | 3.45        | 3.29        | 3.25        | 1.03 | .31    | .96 <i>n.s.</i> |
| (SD)           | (.66)       | (.53)       | (.63)       | (.75)       |      |        |                 |

†  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$

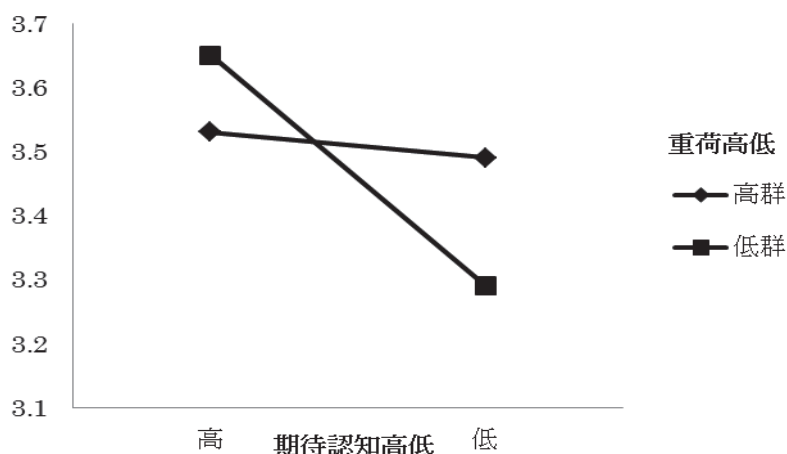


Figure. 1 計画性の交互作用の結果

## (5) 励み（高・低）×期待認知（高・低）の二要因分散分析

次に、「励み」と「期待認知」を平均値で高群と低群にそれぞれ群分けし、キャリアレディネスの低位尺度を従属変数とした二要因分散分析を行った (Table.9)。その結果「励み」において、「OCRS」( $F=9.48$   $r<.01$ )「関心性」( $F=9.91$   $r<.01$ )「自律性」( $F=9.49$   $r<.01$ )「LCRS」( $F=7.93$   $r<.01$ )「積極的将来展望」( $F=15.20$   $r<.001$ )「将来への関心・計画性」( $F=8.93$   $r<.01$ )で有意な主効果が確認された。また、「期待認知」においても、「OCRS」( $F=4.69$   $r<.05$ )「関心性」( $F=4.91$   $r<.05$ )「将来への関心・計画性」( $F=3.92$   $r<.05$ )の3つで有意な主効果が、「計画性」( $F=3.82$   $r<.10$ )と「LCRS」( $F=3.19$   $r<.10$ )の2つで有意傾向ではあるが主効果が確認された。交互作用はすべての変数において、みられなかった。

Table. 9 励み×期待認知の二要因分散分析の結果

| 励み<br>期待認知 | 高 (N=88) |        | 低 (N=79) |        | F値       |                   | 交互作用      |
|------------|----------|--------|----------|--------|----------|-------------------|-----------|
|            | 高        | 低      | 高        | 低      | 励み       | 期待認知              |           |
|            | (N=56)   | (N=32) | (N=32)   | (N=47) |          |                   |           |
| OCRS       | 3.79     | 3.61   | 3.52     | 3.42   | 9.48**   | 4.69*             | .42 n.s.  |
| (SD)       | (.46)    | (.39)  | (.48)    | (.45)  |          |                   |           |
| 関心性        | 3.82     | 3.61   | 3.53     | 3.34   | 9.91**   | 4.91*             | .02 n.s.  |
| (SD)       | (.07)    | (.10)  | (.10)    | (.08)  |          |                   |           |
| 自律性        | 3.89     | 3.73   | 3.58     | 3.57   | 9.49**   | 1.51              | .76 n.s.  |
| (SD)       | (.45)    | (.42)  | (.53)    | (.55)  |          |                   |           |
| 計画性        | 3.66     | 3.44   | 3.45     | 3.34   | 2.59     | 3.82 <sup>†</sup> | .43 n.s.  |
| (SD)       | (.57)    | (.50)  | (.59)    | (.54)  |          |                   |           |
| LCRS       | 3.65     | 3.44   | 3.34     | 3.33   | 7.93**   | 3.19 <sup>†</sup> | 2.28 n.s. |
| (SD)       | (.46)    | (.44)  | (.45)    | (.44)  |          |                   |           |
| 積極的将来展望    | 4.02     | 3.83   | 3.58     | 3.46   | 15.20*** | 3.75 <sup>†</sup> | .36 n.s.  |
| (SD)       | (.56)    | (.54)  | (.74)    | (.64)  |          |                   |           |
| 将来への関心・計画性 | 3.40     | 3.09   | 2.96     | 2.87   | 8.93**   | 3.92*             | 1.30 n.s. |
| (SD)       | (.76)    | (.70)  | (.61)    | (.69)  |          |                   |           |
| 消極的将来展望    | 3.32     | 3.18   | 3.25     | 3.45   | 1.02     | .20               | 2.55 n.s. |
| (SD)       | (.63)    | (.71)  | (.67)    | (.62)  |          |                   |           |

<sup>†</sup>  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

#### 4. 考 察

##### (1) 「人間性期待」とキャリアレディネスについて

「人間性期待」とキャリアレディネスの「自律性」の相関係数を見てみると、OCRS の「自律性」、LCRS の「積極的将来展望」、「将来への関心・計画性」と弱い正の相関がみられた ( $r=.25, p<.001$ ,  $r=.32, p<.001$ ,  $r=.20, p<.01$ ) (Table.5 参照)。このことから仮説 1 は弱いながらも支持できるといえる。人間性に関する期待は先行研究などでも自尊感情を高めるという結果が示されていたように子どもにとって「親から大切に思われている」という感情を育むものだと考えられる。そのため、人間性に関する期待認知が高いと、「職業人になったら自ら積極的に仕事を行おうと思う」や、「職業生活を充実させるためには面倒なことでも積極的にチャレンジする」などの項目が含まれている OCRS の「自律性」や、それと同様の質問項目が含まれている LCRS の「積極的将来展望」、また現在実際に将来に向けて行っている項目である「将来への関心・計画性」において正の相関がみられ、学生のキャリアレディネスを促進していると考えられる。

##### (2) 「教育・就職期待」とキャリアレディネスについて

「教育・就職期待」と OCRS の「関心性」、「計画性」ともに弱い正の相関がみられた ( $r=.21, p<.01$ ,  $r=.24, p<.01$ )。そのため、仮説 2 についても相関は弱いが支持されたといえる。

このことは親からの教育や就職に関する期待の強さが大学生の就職活動や、就職に関する考え方にそれほど強い関連を持っていないということである。このような結果となった要因として考えられることは、大学 4 年生になると自身の今後の人生を大きく左右する就職活動について、親からの期待を感じていようと、感じてなかろうとある程度考えるようになる時期である。周りの学生も就職活動や試験に向けて動き出す中で自分はこれからどのような職業に就きたいのか、自分が就職できる企業はどこなのかという焦燥感にも似た気持ちを誰しも抱える環境こそが大学 4 年生であり、親からの期待に関わらず就職に関する関心や行動につながったと考えられる。

##### (3) 期待への「重荷」とキャリアレディネスについて

Table.5 を見ると、「重荷」と OCRS の「自律性」の間に相関は見られなかった。また LCRS についても「積極的将来展望」と非常に弱い負の相関がみられるが ( $r=-.18, p<.05$ )、「将来への関心・計画性」とは有意な相関がみられなかった。また、重荷の高低と期待認知の高低による二要因分散分析の結果 (Table.8) を見ても重荷における主効果は見られない。そのため、仮説 3 については棄却された。

このことから親からの期待に対して重荷に感じるということを消極的行動に繋がるネガティブなものとして捉えて仮説を立てたが、期待に対する重荷という感情がキャリアレディネスにおいては積極的行動につながるポジティブな側面も持ちあわせているということも考えられる。

また「重荷」と LCRS の「積極的将来展望」とのみ非常に弱い負の相関であったことについては、春日・宇都宮 (2011) が重荷の認知が親からの期待に対する「消極的・回避型行動」と正の相関がみられたとしていたが、本研究においてはこの「積極的将来展望」においてのみ「消極的・回避型行動」としての影響が認められたと考えられる。「積極的将来展望」は今取り組むべきことというよりも、他の下位尺度に比べると将来自分がどれだけ積極的に生きていこうとしているかという漠然とした質問項目が多い。就職活動等は「就職してほしい」というような具体的なゴールに向かって親の期待を

重荷に感じていようととも取り組むことができるのかもしれないが、人生の充実という大きな目標は具体的なゴールがある訳ではない。そのため親からの期待に対して重荷に感じている学生は、どうしても親の期待に応えられるのか分からず積極的な将来展望がイメージしづらいため、負の相関となったのではないかと考えられる。

#### (4) 親との同居・別居による期待認知の差異について

親と同居・別居のちがいで親からの期待認知の得点に有意な差はみられなかった。また、親と同居と一人暮らしの二群でt検定を行ったが、この二群の間にも有意差はみられなかった（Table.6 参照）。そのため仮説4は棄却した。このことから親からの期待認知には同居・別居等の物理的な距離や、会う頻度などは関連がないということが明らかとなった。

このような結果となったことから、大学生の親からの期待認知は、短期間で認知が変容するわけではなく、幼い時からの親からの期待の受け方や、親子関係によって形成されてくるものなのではないかと考えられる。大学生は、幼い時から約20年一番近くで様々な影響を受ける家庭環境の下で、親からの「勉強を頑張ってほしい」「優しい子に育ててほしい」といったさまざまな期待を感じ続けており、そのような期待に対する認知は大学生となって数年間親元を離れていても、そう簡単に変容するものではないと考えられる。

#### (5) 親との同居・別居による期待への評価の差異について

親と同居している大学生の群と、一人暮らしをしている大学生の群の二群で期待に対する評価尺度の下位尺度の「重荷」、「励み」についてt検定を行った（Table.7）。その結果「励み」について有意傾向（ $t(147) = -1.85, p < .10$ ）が、また「重荷」についても、5%水準で有意に親と同居群の得点が高いことがわかる（ $t(147) = 2.44, p < .05$ ）。このことから、一人暮らしをしている大学生のほうが親と同居している大学生よりも親からの期待に対して励みに思っている傾向にあり、親と同居している大学生のほうが親からの期待を有意に重荷に感じているということがいえる。そのため、仮説5については一部支持されたといえる。仮説の一部支持に至った要因としては、親子関係や家族構成なども要因として考えられるが、必要以上の関わりがないことで親子喧嘩等のトラブルや親に対してのイライラなどが募りにくい環境になっているのではないかと考えられる。一人暮らしなどで親と離れたことで生活していくことの大変さを感じて、親へ感謝の気持ちを持つようになったという話を聞くこともある。このような親への感謝の気持ちや関係の悪化につながる要因が、同居に比べて少ないということが親からの期待を励みと感ずることに繋がっているのではないかと考えた。つまり、親との心理的・物理的距離が離れることで、子どもの親の期待に対する評価が変化するのではと考えられる。その一方で親と同居している大学生が有意に期待を重荷に感じているという結果も出ているが、やはり同居していると親との関係を完全に断つことが難しく、家の中でも外でも行動には親からの介入が大学生といえどもあるのではないかと考えられる。その中で期待を認知しながらも自分の考えを持ち行動していたとしても親との何気ない会話などの端々から強い期待を感じ、プレッシャーを感じたりすることで期待を重荷と感じているのではないかと考えられる。

#### (6) まとめ

本研究では、仮説としては、「1. 人間性に関する期待に対する期待認知の高さと、キャリアレディ

ネスの自律は正の相関がある。」「2. 教育や就職に関する期待認知の高さと OCRS の関心性、計画性は正の相関がある。」「3. 親からの期待に対する重荷の認知とキャリアレディネスの自律は負の相関がある。」「4. 親と別居している学生は、家族と同居している学生より期待認知が低い。」「5. 親と別居している学生は、家族と同居している学生よりも期待に対して励みに感じている。」の5つをたてた。

分析の結果、仮説1と2は弱いながらも正の相関がみられたため支持された。仮説3は「励み」において有意傾向というかたちになったため一部支持とした。仮説4は棄却され、仮説5は一部支持という結果になった。つまり、大学生の就職活動において、親からの人間性に関する期待は、キャリアレディネスの消極的将来展望を除くすべての要因に関連していることが示され、さらに教育・就職に関する期待も、キャリアレディネスの関心性や計画性とも関連しており、親の積極的な期待が、子どものキャリアレディネスを促進し、就職活動を後押しし支えていると考えられる。その一方で、教育・就職に関する期待は、積極的な将来展望につながると共に、消極的な将来展望との関連も示されており、その期待のあり方によっては、ネガティブな影響を与えることも示唆されている。

次に、親の期待への評価について、重荷と励みについて検討したが、励みについては、キャリアレディネスの多くの要因と関連が見られ、親の期待を励みとして感じることで、大学生が就職活動に積極的に関与していくことが示唆されている。他方、重荷については、仮説3の考察でも述べたように、重荷が自律性にネガティブな影響を与えることはなかったが、積極的な将来展望において、弱いネガティブな関連が示されただけであった。したがって、今回取り上げた「重荷」が、実際に学生にとって、どの程度の重荷として感じられていたのか、さらに検討する必要があると共に、期待に対する評価として、「重荷」と感じるものと「励み」と感じるものの差異について、詳しい検討が必要であると考えられる。

次に、現在の居住形態に着目して親からの期待に対する認知、その期待に対する評価と大学生のキャリア成熟との関連について検討した。現在の居住形態によって期待認知に有意差は見られず、期待認知というものが一朝一夕のものではなく、幼いころからの親からの繰り返し発せられる発言・態度等による、強固な根本的な認知なのではないかということが考えられた。また先行研究では重荷は消極的な行動につながるネガティブなものとして捉えられてきたが、本研究では重荷という評価も積極的な行動につながるポジティブな側面を持っているという可能性もみえてきた。

## 参考文献

(著者五十音順)

内田利広 (2014) : 期待とあきらめの心理. 創元社

春日 秀郎・宇都宮 博 (2011). 親からの期待が大学生の自尊感情に与える影響 立命館人間科学研究, 22, 45-55

春日 秀郎・宇都宮 博・サトウ タツヤ (2014). 親の期待認知が大学生の自己抑制型行動特性及び生活満足感へ与える影響 : 期待に対する反応様式に注目して 発達心理学研究, 25(2), 121-132

著者名 (発行年) 「論文名」『掲載誌名』発行所名, 引用頁

坂柳恒夫 (1991). 進路成熟の測定と研究課題 愛知教育大学教科教育センター研究報告, 15, 269-280

坂柳 恒夫 (1996). 大学生のキャリア成熟に関する研究 愛知教育大学教科教育センター研究報告, 20, 9-18

ベネッセ教育総合研究所 (2008). 大学生の居住形態に関する調査

[http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/daigaku\\_jittai/hon/pdf/data\\_02.pdf](http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/daigaku_jittai/hon/pdf/data_02.pdf) (参照 2018-01-16)

文部科学省 (2017). 学校基本調査. [http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/other/\\_\\_\\_icsFiles/afieldfile/2017/12/22/1388639\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/___icsFiles/afieldfile/2017/12/22/1388639_1.pdf) (参照 2018-01-16)

吉田 真理子・喜久 優佳・近藤 友美・江口 凌・佟 慧・谷口 弘一 (2014). 大学生の居住形態が心理的負債感に及ぼす影響 長崎大学教育実践総合センター紀要, 13, 335-337

渡部 雪子・新井邦二郎 (2008). 親の期待研究の動向と展望 Tsukuba Psychological Research, 36, 75-83

